

12月第1週の礼拝説教

■日 時：2025年12月7日（日）10：30～11：30 待降節第二主日礼拝

■説 教：保科けい子牧師

■聖 書：新約：ヨハネによる福音書1章1～5節（新約P163）

■説教題：「人間を照らす光」

■讃美歌：231（久しく待ちにし 救いの主來たり、）

263（「見張りの人よ、夜明けはまだか。）

先週の日曜日の11月30日にアドベントクランツにろうそくが一本灯されました。12月に入つてもあまりアドベントに入つているという実感がわきませんでした。しかし、先週の金曜日から急に寒くなりまつたら、やはり今年も主イエスのご降誕をお待ちする待降節になつたのだという思いが湧いてきました。かつて、10年近くおりました仙台では、「光のページェント」という行事がこの季節には行われます。今年も12月5日に点灯式が行われ、市内の定禅寺通りのケヤキ並木を中心に幻想的な光の美しさが展開されているようです。そのままばゆいばかりのイルミネーションを見て、今年もクリスマスが近づいているのだなと思わせられたことを懐かしく思い出しました。立川教会のイルミネーションも、夜に道を歩く人たちが立ち止まって眺めたり写真を撮つたりするようになりました。光が私たちに与えてくれる不思議さを感じさせられています。

ところで私は、今年の待降節からクリスマスにかけては、ヨハネによる福音書1章を取り上げて皆様と一緒に礼拝をささげたいと、夏ぐらいから考えるようになりました。それは、私の信仰生活を貫いている一本の線のような箇所だからです。この箇所に本当の意味で出会つたのは、2008年ごろに『光あれ！』という説教集を読んだときでした。その説教集の最初に、創世記1章1節から5節までを語つているものがありました。その箇所を読んでみます。「神が天地を創造される前は、『地は混沌であつて、闇が深淵の面にあり、神の靈が水の面を動いていた。』天地が創造される前には、混沌と深淵と闇があつただけだというのです。これは、神の天地創造以前の状態を『こうこうであった』と書いているだけではありません。それと同時に、今も当てはまるこの世界の秘密を書いています。すなわち、こういうことが書かれているのです。『神は混沌の中に秩序を与え、この世のものを底知れぬ深淵に落ち込まないように支え、闇を追い払つて光を注がれた。しかし、この秩序の背後には混沌が控えており、存在しているものの底には深淵が口を開けており、その背後を闇が取り巻いている。つまり、この世界では、私たち人間は、いつでも混沌に陥る可能性を持っており、いつ深淵に落ち込むかも知れず、闇に包まれるかも知れない。もし神がそれらのものから私たちを守つておられないとしたら、あるいは深淵に落ち込み、あるいは闇に包まれる可能性を常に持つてゐる。』それが、二節の背後にある人生の経験です。しかし、神の自由な愛の意思によって、そうならないように保たれている。それが二節に言い表されている信仰です。』とありました。（大崎節郎著『光あれ！』）これまでに何度もお話ししたことですが、私はこれまで、「キリスト教とは初めと終わりがはっきりと示されている宗教である。しかも、終わりから初めを見るという歴史観に立つてゐる」ということを、よく聞かされてきました。しかし、私自身が本当にそのことを実感し納得してきたかと言えばそうではなく、頭の中での知識に過ぎなかつたように思います。けれども今は、聖書の書き出しが「初めに、神は天地を創造された。」という御言葉であることを深く思うとき、「天地すべてが神様によって創造されたのだから、すべての事柄の筋道が明らかである。だから、私たちを不安に陥れ根底から揺るがすものは何もないはずだ。」という不思議な安心感が湧きあがつてくるのです。また、私たち夫婦は二人とも牧師です。しかし、時々、

互いにいろいろなことであまりにも後ろ向きになり愚痴を言い出すと、夫が自分自身にも言い聞かせるように「それでも、神様はおられるから心配ない」と言うのです。そういうわけで、私たちの日常生活において深く落ち込むことがあっても、あるいはこの世の厳しい現実に会ったりそれを見聞きすることがあったりしても、「それでも、神様はおられるから心配ない」と信じることができさえすれば、そこから再び神様に向かって祈ることができ、歩み出せるという経験をしてきました。

そのことを思いながら、先週は本日の聖書箇所を繰り返し読んでいました。ヨハネによる福音書の不思議なところは、20章30、31節に「本書の目的」という見出しの小さな段落があり、31節には「これらのことが書かれたのは、あなたがたがイエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。」と述べられていることです。つまり、ヨハネによる福音書の書かれた背景には、主イエスを神の子メシアであると信じそのように告白することが困難な状況があったがゆえに、あえて、福音書を書く目的が明確に記されているとも言えるのです。そのことを踏まえながら、1章の1節から5節を読んでいました。ヨハネによる福音書の著者は、決して平穏な状況とは言えない当時のユダヤ教の指導者たちとの関係の中で、創世記の天地創造物語を意識して、創世記と同様に「初めに」と書き出している、と考えられています。そして、「初めに神と共にあった」言（ことば）によって万物が創造されていると宣言し、その言こそ、命であり、光である、と語っています。

聖書66巻の書き出しが「初めに」という言葉であることを深く思うとき、「天地すべてが神様によって創造されたのだから、すべての事柄の筋道が明らかである」ということを考えさせられます。ヨハネによる福音書ではそのような事柄の筋道を「言（ロゴス）」と記しています。ですから、「筋道が明らかであるならば、私たちを不安に陥れ根底から揺るがすものは何もないはずだ。」という不思議な安心感が湧きあがってくるのです。そして、ヨハネによる福音書1章1節から5節で今の私たちにも問われているのは、私たちが本当に「ロゴス」なる神として、主イエスを信じているか、ということになるでしょう。言い換えれば、この全世界の成り立ちの最初からおられ、歴史を支配し、今も後も世界を支配する力をその御言葉のうちにお持ちになっておられる主イエスが、御言葉を持って今この時も、私たちに親しく臨んでおられることを信じているのか、ということになります。

4節にまいります。「言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。」とあります。ここで、言と命と光とのつながりが記されています。ヨハネによる福音書では、「言」は主イエスご自身を表しています。そして、「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。」（11章25節）、「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。」（8章12節）という語り口で、ご自身が「命」「光」であることを公になさいました。ヨハネによる福音書の1章4節では、創世記の時に混沌なる地や深淵の面にある闇を秩序ある状態に分けるものとして注がれた光が、今や私たち人間を照らす光としておられるというのです。ですから、その力の大きさは私たち人間にとてははかり知れないものであるのです。だからこそ、どのような時であってもどのような場であっても「それでも、神様はおられるから心配ない」と告白できるのです。

最後に、ヨハネによる福音書の1章5節にまいりましょう。「光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。」とあります。注意して御覧いただくとその違いが見えてくると思いますが、「輝いている」は現在形で記されており、「理解しなかった」は過去形になっております。時間の流れとしては通常、過去形で記される出来事が先に来たうえで、現

在の出来事があります。しかし、ここではその順序が逆になっています。「暗闇は光を理解しなかった」という言葉は、口語訳聖書では「やみはこれに勝たなかった」と訳されていましたが、やはり過去形の表現でした。このことは、暗闇やそれに代表されるものがすでに分けられて「光」なる主イエスによって克服されている、と言えるのではないでしようか。たとえば、私たちの「罪」は主イエスの十字架によってあがなわれていること、私たちの「死」は主イエスが陰府にまで降られよみがえられたことによってすでに支配されていること、を覚えたいと思います。そして、「光」なる主イエスはいつも現在形で暗闇の中で輝いておられるのです。そういうわけで、今生かされている私たちに対しても、言であり、光であり、命である主イエスご自身が「光あれ」と語りかけてくださる時、私たちはその光に照らされて命の光を持つものとして新しく生じさせていただける、ということになるのではないでしょうか。イルミネーションのきらびやかな光、また、ここにあるアドベントクリンツに灯された小さな光、いずれも私たちの間に到来してくださる主イエス・キリストを指し示すものです。この時期に、今一度、その光に照らされてこそ私たちは生ききることができるのを深く考えたいと思います。